



Title	マルクスにおける価値実体規定について
Author(s)	小黒, 正夫
Citation	経済學研究, 41(4), 96-106
Issue Date	1992-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/31901">http://hdl.handle.net/2115/31901</a>
Type	bulletin (article)
File Information	41(4)_P96-106.pdf



[Instructions for use](#)

## マルクスにおける価値実体規定について

小黒正夫

本稿はマルクスの『資本論』の初版本文、付録、第2版のための準備草稿<sup>1)</sup>、第2版において価値の実体がどのように規定されているかを跡づけ、確認することを目的とするものである。これは近年とくに論争点の一つとして注目されている抽象的人間的労働の性格に関する問題を解明するための基礎的作業となるであろう。

### 1. 『資本論』初版本文における価値実体規定について

『資本論』初版本文における価値実体に関する記述を順をおって示せばつぎのようになる。

- ①「いろいろに違う諸使用価値においてただ違って表されるだけの共通な社会的実体、それは—労働である。」<sup>2)</sup>
- ②「…ある使用価値または財貨がある価値をもっているのは、ただ、労働がそれにおいて対象化されている…からにはかならないのである。」<sup>3)</sup>
- ③「では、その価値の大きさはどのようにして計られるのであろうか？そのなかに含まれている『価値形成実体』の、労働の、量によって、である。」<sup>4)</sup>
- ④「われわれは今では価値の実体を知っている。

それは労働である。」<sup>5)</sup>

- ⑤「価値としては、上着とリンネルとは、同じ実体をもつ諸物であり、同じ種類の労働の客体的な諸表現である。」<sup>6)</sup>
- ⑥「生産的な活動の被規定性を、したがってまた労働の有用な性格を無視するならば、労働に残っているものは、これが人間の労働力の支出であるということである。裁縫労働と織布とは、質的に違う生産的な活動であるとはいえ、両方とも人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的な支出なのであって、この意味において両方とも人間的労働である。」<sup>7)</sup>
- ⑦「しかし、諸商品の価値は、単なる人間的労働を、人間の労働力一般の支出を、表わしている。」<sup>8)</sup>
- ⑧「この人間的労働は、だれでも普通の人間が、特別に発達することなしに、自分の肉体的有機体のなかにもっている単純な労働力の支出である。たとえば、農僕の労働は単純な労働力とみなされ、したがってまた、その労働力の支出は単純な労働、すなわち、それ以上に修飾のついていない人間的労働とみなされるであろうが…。」<sup>9)</sup>
- ⑨「…裁縫労働と織布とが上着価値とリンネル価値との実体であるのは、ただ、裁縫労働と織布との特殊な質が捨象されて、両方が同じ質を、人間的労働という質を、もっているかぎりにおいてのみのことなのである。」<sup>10)</sup>

1) Marx-Engels Gesamtausgabe, Abt2. Bd.6., Berlin, Dietz Verlag, 1987, S.1-54. (以下MEGA, II-6, S.1-54等と略記する)

2) MEGA, II-5, S.19. 訳は岡崎次郎訳, 国民文庫版と江夏美千穂訳, 幻燈社版を参照した。

3) *Ibid.*, S.20

4) *Ibid.*

5) *Ibid.*, S.21

6) *Ibid.*, S.24

7), 8) *Ibid.*

9) *Ibid.*, S.24-25

10) *Ibid.*, S.25

⑩「つまり、商品のなかに含まれている労働は、使用価値との関連においては、ただ質的にのみ認められるとすれば、それは、価値の大きさと関連においては、もはやそれ以外に質のない人間的労働に還元されていて、ただ量的にのみ認められるのである。」<sup>11)</sup>

⑪「商品は、価値であるためには、なによりもまず使用対象でなければならないのであるが、それと同様に、労働も、人間の労働力の支出として、したがってまた単なる人間的労働として、数えられるためには、なによりもまず有用な労働、すなわち目的を規定された生産的な活動でなければならないのである。」<sup>12)</sup>

以上、初版において価値形態の分析が開始される前までの所で価値の実体に関して述べられている主な所を取り出してみた。いわば第2版以後の第1章第1節と第2節に相当する部分において、マルクスが『資本論』初版において価値の実体に関してどのように表現しているかが確認できる。以下、若干これらを検討してみたい。

まず明らかなのは、マルクスは「価値形成実体」(引用③)として、なんら形容詞も説明もつかない「労働」という表現を用いているということである。引用①～④においてまさにそうになっている。とくに、「共通な社会的実体、それは一労働である。」(引用①)あるいは、「『価値形成実体』の、労働の…」(引用③)、さらには「われわれは今では価値の実体を知っている。それは労働である。」(引用④)、といった叙述において明確に現われている。

さらにこれらの叙述から確認できることは、価値実体規定として「人間的労働 (menschliche Arbeit)」および「人間の労働力 (menschliche Arbeitskraft)」という表現が用いられていることである(引用⑥～⑩)。この「人間的」ということについてマルクスは「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的な支出」(引用⑥)という意

味で「人間的」労働である、と説明している。そしてこの「人間的労働」をもう一步限定して「単なる人間的労働 (menschliche Arbeit schlechthin)」(引用⑦, ⑩)あるいは「それ以外に質のない人間労働 (menschliche Arbeit ohne weitere Qualität)」(引用⑩)として表現されている。「労働力」に関しては「人間の労働力一般 (menschliche Arbeitskraft überhaupt)」(引用⑦)という表現が用いられている。

後にみるように、価値実体規定として「労働」とする表現は決して不十分なものでも、また誤りでもなく、第2版以後においても用いられている表現である。人間の労働が考察の対象となっていることが明らかである場合に<sup>13)</sup>、ことさら「人間的」労働といわなくてもよい。「労働」という言葉でわれわれは一般に、全ての具体的な諸労働に共通な要素を理解しているはずである。したがって「人間的」という限定詞はことさらにをよりいっそう明確にするという意味をもつ。

ところで筆者はかつて引用文⑧の問題性について指摘したことがある<sup>14)</sup>。いま一度それを述べれば、つぎのようなことであった。問題点は2つあった。まずは、「労働」のいわば典型として「単純な労働」をあげることの是非の問題である。「労働」という言葉で理解されることが、一般的であり、その意味で抽象的であるとすれば、その典型をあげること自体、必要があるのかということである。

もう一つの問題点は、さらにその単純な労働の具体例として「農僕の労働」にまで言及している点である。例えば、マルクスは「それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容もない人間の労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性で

13) 「人間にだけもっぱらそなわっている形態の労働を、想定しよう。蜘蛛は織職の作業に似た作業を行い、蜜蜂は、蜂房を建造して多くの人間の建築師を赤面させる。」(MEGA II-5.S,129)

14) 拙稿「マルクスにおける価値概念の確立について」『旭川大学紀要』第30号(1990年4月)を参照されたい。

11) *Ibid.*, S.25-26

12) *Ibid.*, S.27

あり、一つの思考産物である。」<sup>15)</sup>と述べている。つまり商品の価値対象性は思考産物である、というのである。そのような価値の実体をなす労働として「農僕の労働」を具体的にイメージしているわけである。そのことの意味はどこにあるのか。認識論的に、方法的に問題はないのか。筆者としてはまだ、問題の指摘にとどめておき、いずれ機会を得て論究したいと考えている。

つぎに、さらに初版本文のなかで、いわば価値形態の分析を行なっている部分で価値実体がどのように表現されているかを見てみることにする。

⑫「質的にリンネルは自分に上着を等置するのであるが、そうするのは、リンネルが自分に上着を、同種の人間的労働の、すなわちそれ自身の価値実体の、対象化として関係させることによって、である。」<sup>16)</sup>

⑬「価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明に結晶した労働の凝固をなしている。」<sup>17)</sup>

⑭「使用価値上着がリンネル価値の現象形態になるのは、ただ、リンネルが抽象的人間的労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的物質化としての上着物質に関係しているからにほかならない。」<sup>18)</sup>

⑮「もしリンネルがその価値を上着においてではなく靴墨において表現したとすれば、リンネルにとってはまたやはり裁縫ではなく靴墨作りが抽象的人間的労働の直接的実現形態として認められたであろう。つまり、ある使用価値または商品体が価値の現象形態または等価値となるのは、ただ、別のある商品が、前記の商品体に含まれている具体的な有用労働種類に、抽象的人間的労働の直接的実現形態としてのそれに、関係する、ということによってのみのことである。」<sup>19)</sup>

⑯「それと同様に、使用価値のなかに含まれてい

る具体的な有用労働が、それ自身の反対物に、抽象的人間的労働の単なる実現形態になる。」<sup>20)</sup>

⑰「商品は、もともと、一つの二重物、使用価値にして価値、有用労働の生産物にして抽象的な労働凝固体 (abstrakte Arbeitsgallerte) なのである。」<sup>21)</sup>

⑱「その商品は、それ自身のなかに含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間的労働の単なる実現形態として関係することはできないが、しかし、他の商品種類に含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間的労働の単なる実現形態として関係することができるのである。」<sup>22)</sup>

⑲「すなわち、リンネルは、抽象的人間的労働の (… der menschlichen Arbeit in abstracto) 感覚的に存在する物質化としての、しがつてまた存在する価値体としての、上着に関係するのである。」<sup>23)</sup>

⑳「価値としては諸商品は同じ単位の、すなわち抽象的人間的労働の、諸表現である。」<sup>24)</sup>

引用⑭で初めて「抽象的人間的労働 (abstrakte menschliche Arbeit) という表現が使われている。「人間的労働」については、先にみたように、その表現の根拠が示されている。しかし、「抽象的」という表現については特別に説明されておらず、なぜここで初めてこういう表現が用いられたのかは、必ずしも明言されてはいない。また、「抽象的人間的労働」という表現がなされた以後においても、「人間的労働」、「単なる人間的労働 (menschliche Arbeit schlechthin)」、「人間的労働」、「一般的労働 (allgemeine Arbeit)】<sup>25)</sup>といった表現が使われている。ここでは、この「抽象的人間的労働」という、価値実体を表す表現が、第2版以後における第1節、第2節に相当する、すなわち商品価値の規定が

15) MEGA II-5, S.30.

16) *Ibid.*, S.29

17) *Ibid.*, S.30

18) *Ibid.*

19) *Ibid.*, S.31

20) *Ibid.*, S.32

21) *Ibid.*

22) *Ibid.*

23) *Ibid.*, S.34

24) *Ibid.*, S.38

25) *Ibid.*, S.37.38

なされ、あるいは商品を生産する労働の二重性が説かれている、部分には一度も出てきていないこと、そして価値形態の分析の所で初めて使われていることを指摘しておきたい。

価値形態の分析が行なわれている所では、その他にも、価値実体規定に関する叙述がみられるが、すでにあげた引用と内容的に大きく異なるものではないので、網羅的に数へあげることはさしひかえることとする。

以下においては、初版における「物神性」に関する叙述のなかで、価値の実体についての規定がどのように表現されているかをみてみよう。

①「だから、商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは出てこないのである。それはまたそれ自体として考察された諸価値規定からも出てこない。なぜならば、第一に、いろいろな有用労働または生産活動がどんなに違っていようとも、それらが他の有機体とは違う独自に人間的な有機体の諸機能であるということや、このような機能は、その内容や形成がどうであろうと、どれも本質的には人間の脳や神経や筋肉や感覚器官などの支出であるということは、生理学上の真理だからである。」<sup>26)</sup>

②「彼の生産的な諸機能はいろいろに違っているが、彼は、それらの諸機能が同じロビンソンのいろいろな活動形態でしかなく、したがって人間的労働のいろいろな仕方ではない、ということを知っている。」<sup>27)</sup>

③「もし人間たちが彼らの諸生産物を、これらの諸物が同質の人間的労働の単に物的な外皮として認められるかぎりにおいて、諸価値として相互に関係させられるのだとすれば、このことのうちには同時にそれとは逆に、彼らのいろいろに違った労働はただ物的な外皮のなかの同質な人間的労働としてのみ認められているのだ、ということが含まれている。」<sup>28)</sup>

④「人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品とし

て関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間的労働に等置することを強制されているのであつ。」<sup>29)</sup>

これらから明らかなように、ここにおいても価値の実体を形成するものとして、基本的に人間的労働、抽象的人間的労働という表現が用いられている。もちろん、その他にも例えば、「同質の人間的労働 (gleichartig menschliche Arbeit)」、「同等な人間的労働 (gleiche menschliche Arbeit)」等の表現も用いられている。しかしながら、ここで重要なのは何といても引用②であろう。これは価値規定の中味の一つとしての労働の質について述べられたものである。この引用②と先の引用⑥とは表現上酷似している。引用⑥は、裁縫労働と織布が共に「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的な支出」であつて、両方とも「人間的労働」である、ことが述べられている。労働の具体的・現実的あり方が千差万別であつても、それらがいずれも「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」であり、したがってそれらは人間の労働一般、労働そのもの、あるいは人間的労働である、といった事が語られている。引用②ではさらに一步ふみ込んで、有用労働が「どれも本質的には人間の脳や神経や筋肉や感覚器官などの支出であるということ」が生理学上の真理である、として価値実体としての労働の質をよりはっきりとした形で明確にしている<sup>30)</sup>。この部分の叙述は、抽象的人間的労働が商品生産社会に固有の歴史的カテゴリーかあるいは人間社会の歴史を貫通する超歴史的カテゴリーかという論争<sup>31)</sup>において、いわゆる超歴史的カテゴリー説に強力な根

29) *Ibid.*

30) 直接本稿の考察の対象としてはないが、マルクスの『経済学批判』においても同様の表現がみられる。例えば「…交換価値であらわされる労働は、一般的人間的労働として表現されるであろう。一般的人間的労働というこの抽象は、あるあたえられた社会のそれぞれの平均的個人がなす平均労働、人間の筋肉、神経、脳等々のある一定の生産的支出のうち

に実在している。」(MEW. Bd. 13, S. 18)

31) この論争について本稿で立ち入るつもりはない。さ

26) *Ibid.*, S. 44

27) *Ibid.*, S. 45

28) *Ibid.*, S. 46

扱を与えている。少なくともマルクスのいう「人間的労働」の具体的なイメージがここで述べられているといえるであろう。

以上、『資本論』ドイツ語初版の商品を分析している箇所である、第1章の(一)において、価値実体に関してどのような表現が使われているかをみてきた。つぎに『資本論』の同じく初版の付録「価値形態」についてみていくこととする。

## 2. 『資本論』初版の付録について

㉔「上着が価値であるのは、ただ、それがその生産において支出された人間的労働力の物的な表現であり、したがって、抽象的な人間的労働の凝固であるかぎりにおいてのみのことである抽象的な労働であるのは、上着のなかに含まれている労働の特定の、有用な、具体的な性格からは抽象されているからであり、人間的労働であるのは、労働がここではただ人間的労働力一般の支出としてのみ物を言うからである。したがって、リンネルは、人間的労働を唯一の表材としている一物体としての上着に関係させられることなしには、一つの価値物としての上着に関係することはできないし、言い換えれば、価値としての上着に関係させられることはできない。ところが、価値としては、リンネルも同じ人間的労働の凝固なのである。だから、この関係のなかでは、上着という物体が、リンネルと自分とに共通な価値実体すなわち人間的労働を代表しているのである。」<sup>32)</sup>

㉕「諸価値としては、すべての商品は、同じ単位の、すなわち人間的労働の、同等と認められる、互いに置き換えられる、すなわち交換可能な諸

表現である。」<sup>33)</sup>

㉖「 $\beta$  等価形態の第二の特性。具体的な労働がその反対物たる抽象的な人間的労働になる。

上着はリンネルの価値表現においては価値体として認められており、したがって、上着の物体形態または現物形態は、価値形態として、すなわち無差別な人間的労働の、単なる人間的労働の具体化として、認められている。しかし、それによって上着という有用物がつくられてその特定の形態を得るところの労働は、抽象的な人間的労働ではなく、単なる人間的労働ではなくて、一定の、有用な、具体的な労働種類—裁縫労働である。」<sup>34)</sup>

㉗「しかし、上着であろうと小麦であろうと鉄であろうと、つねに、リンネルの等価物はリンネルにたいしては価値体として、したがってまた、単なる人間的労働の具体化として、認められているのであろう。そしてまたつねに、等価物の特定の物体形態は、それが上着であろうと小麦であろうと鉄であろうと、抽象的な人間的労働の具体化ではなくて、裁縫労働なり農民労働なり鉱山労働なりとにかく一定の、具体的な、有用労働種類の具体化であることに変わりはないであろう。だから、等価物の商品体を生産する特定の、具体的な、有用労働は、つねに必然的に、単なる人間労働の、すなわち抽象的な人間的労働の、特定の實現形態または現象形態として認められなければならないのである。たとえば上着は価値体として、したがって単なる人間的労働の具体化として、認められるのは、ただ、裁縫労働が、それにおいて人間的労働力が支出されるところの、すなわち、それにおいて抽象的な人間的労働が實現されるところの、特定の形態として認められているかぎりにおいてのみのことである。」<sup>35)</sup>

㉘「この取り違えは不可避である。というのは、労働生産物で表わされている労働が価値形成的であるのは、ただ、その労働が無差別な人間的労働

しあたり、正木八郎「抽象的な人間労働」(佐藤金三郎他編『資本論を学ぶ』I、有斐閣、1977年所収)、明石博行「商品に表わされる労働の二重性」(種瀬茂編著『資本論の研究』、青木書店、1986年所収)を参照されたい。

32) MEGA II-5, S. 630.

33) *Ibid.*, S. 631

34) *Ibid.*, S. 633

35) *Ibid.*, S. 633-634

働であり、したがって、一生産物の価値に対象化されている労働が別種の一生産物の価値に対象化されている労働とまったく区別されないかぎりにおいてのみのことだからである。」<sup>36)</sup>

③⑥「しかし、別種の諸労働が同等であるのは、ただ、それらが人間的労働一般、抽象的人間的労働、すなわち人間的労働力の支出であるかぎりにおいてのみのことである。」<sup>37)</sup>

③⑦「価値表現の秘密、すなわち、人間的労働一般であるがゆえの、またそのかぎりにおいての、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見の強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。」<sup>38)</sup>

③⑧「一商品の、たとえばリンネルの、価値はいまや商品世界のすべての他の要素で表わされている。どの他の商品体でもリンネル価値の鏡となる。こうして、この価値そのものがはじめて真に無差別な人間的労働の凝固として現われる。」<sup>39)</sup>

③⑨「同様に、それぞれの特殊な商品等価物に含まれている特定の、具体的な、有用な労働種類も、ただ、人間的労働の特殊な、したがって尽きることのない現象形態でしかない。人間的労働は、その完全な、または全体的な現象形態を、たしかにあの特殊な諸現象形態の総範囲のうちにもってはいる。しかし、こうして人間的労働は統一的な現象形態をもってはいないのである。」<sup>40)</sup>

③⑩「その一般的な性格によってはじめて価値形態は価値概念に対応する。価値形態とは、それにおいて諸商品が無差別な、同質な、人間的労働の単なる凝固として、すなわち、同じ労働実体の物的な諸表現として、相互に現われるところの、一つの形態でなければならなかった。このことはいまでは達成されている。なぜならば、

諸商品は、すべて、同じ労働の、すなわちリンネルに含まれている労働の、物質化として、または労働の同じ物質化として、すなわちリンネルとして、表現されているからである。」<sup>41)</sup>

③⑪「すべての他の商品にとっては、たとえそれらがどんなに種類の違った諸労働の諸生産物であろうとも、リンネルはそれらの生産物そのもののなかに含まれている諸労働の現象形態として、したがってまた、同種の、無差別な人間的労働の具体化として認められているのである。だから、織布、この特殊な具体的な労働種類は、いまでは、リンネルにたいする商品世界の価値関係を通じて、抽象的な人間的労働の、すなわち、人間的労働力一般の支出の、一般的で且つ直接に十全な実現形態として、認められているのである。」<sup>42)</sup>

これらの引用のなかで特に③⑪において抽象的人間的労働という場合の「抽象的」と「人間的」の意味内容が明確にされている点が注目される。すなわち「抽象的」ということの意味は「労働の特定の、有用な、具体的な性格から抽象されている」ということである。そして「人間的(menschliche)」というの「労働がここではただ人間的労働力一般の支出としてのみ」考えられているということである。「人間的(menschliche)労働」については、すでに指摘したように、引用③⑥において、労働が「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」として「人間的労働」である、とマルクスは明言している。比較してみると引用③⑪よりも引用③⑥の方が「人間的(menschliche)労働」の「人間的(menschliche)」の意味をより具体的に説明しているといえよう。

またここでは「無差別な人間的労働(unterschiedslose menschliche Arbeit)」(引用③⑦, ③⑧, ③⑨), あるいは「無差別な、同質な、人間的労働(unterschiedslose, gleichartige, menschliche Arbeit)」, さらには「同種の、無差別な人

36) *Ibid.*, S.634

37) *Ibid.*, S.635

38) *Ibid.*, S.636

39) *Ibid.*, S.641

40) *Ibid.*, S.642

41) *Ibid.*, S.643

42) *Ibid.*, S.644

間的労働 (gleichartige, unterschiedslose, menschliche Arbeit) (引用<sup>43</sup>) というように「無差別な (unterschiedslose)」という形容詞をつけて、価値の実体たる労働を表わしている箇所がいくつかみられる。

### 3. 『資本論』第2版のための準備草稿における価値実体規定についての表現について

『資本論』ドイツ語第2版のための準備草稿「『資本論』第1巻のための補足と改訂 (1871年12月-1872年1月)」<sup>43)</sup>は、マルクスが『資本論』の第2版を出版するために記した手稿である。MEGAのII-6で初めて公けにされたこの手稿は特に価値形態論の改訂が大部分の内容をなしている。ここで、この手稿において価値実体たる労働についてどのような表現が用いられているかをみとめることとする。

- ③⑥「労働生産物を、それらの非常に多様な使用対象とは異なる、同じ種類の価値対象性に還元するさいに、一つの状況を見過ごしてはならない。すなわち、諸労働生産物が価値対象性を持つ、あるいは価値つまり単なる労働凝固であるのは、それらのなかに実現されているさまざまな具体的諸労働が、すべて抽象的人間的労働に還元されているからに他ならない、ということである。」<sup>44)</sup>
- ③⑦「しかしながら、商品価値の実体を形成する労働は、等しい人間の労働であり、同じ人間の労働力の支出である。それゆえ、商品世界のなかで現われる社会の総労働は、それが無数の個々の諸労働力から成り立っているにもかかわらず、一つのそして同じ抽象的労働力なのである。」<sup>45)</sup>
- ③⑧「すべての労働は、一面では、人間の労働力の

支出である。(中略)それとは反対に、商品価値は、次の事を述べているにすぎない。すなわち、この物は人間の労働力の支出以外のなにもも現わしてはならず、…。」<sup>46)</sup>

- ③⑨「すべての労働は、一面では、人間の労働力の支出である。生産物の価値は、その生産物が支出された労働力すなわち人間の労働そのもの以外のなにもも現わしていないということ、…を意味しているのである。」<sup>47)</sup>
- ④⑩「[すべての労働は]一面では、人間の労働力一般の支出、したがって抽象的人間的労働である。そして、抽象的人間的労働というこの属性において労働は価値を形成する。」<sup>48)</sup>
- ④⑪「諸商品は一般に、それが同じ社会的単位のものであり、つまり人間の労働の表現であるかぎりでのみ、それらの雑多な使用対象性とは異なった社会的価値対象性をもつのである。」<sup>49)</sup>
- ④⑫「ある一つの商品は、それが単に、その生産に支出された人間の労働力の物的表現、物質的外皮である限りにおいて、したがって、人間の労働そのもの、抽象的人間的労働の、結晶である限りにおいて、それは価値なのである。」
- ④⑬「上着の生産においては、裁縫労働という形態のもとに、人間の労働力が実際に支出され、したがって、上着のなかに人間の労働が堆積されている。」<sup>50)</sup>
- ④⑭「価値としては、リンネルはただ支出された人間の労働力だけから成り立っており、そしてそれゆえ、透明に結晶した労働凝固体を成している。しかし、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは、しかもどの結晶体でも労働の痕跡を示しているというわけではないが、その労働は無差別な人間の労働ではなくて、織布や紡績

43) MEGA II-6, S1-54. (拙訳『マルクス・エンゲルスマルクス主義研究』第5号, 第7号を参照されたい。) なお、拙稿: 価値形態論改訂のための準備草稿「『資本論』第一巻のための補足と改訂 (1871年12月-1872年1月)」について、『経済』, 1988年11月号を合せて参照されたい。

44) MEGA II-6, S. 4

45) *Ibid.*

46) *Ibid.*, S. 5

47) *Ibid.*

48) *Ibid.* 尚、前2つの引用とともに、同じく初版で労働の二重性を論じている最後の部分の改訂のためのもので、それぞれ異文である。

49) *Ibid.*, S. 7

50) *Ibid.*, S. 12



などであって…。それゆえ、リンネルをその生産に支出された人間的労働力の単なる物的表現として把握するためには、それを現実に物としているものすべてを無視しなければならない。それ自身抽象的でありそれ以外の質も内容ももたない人間的労働そのものの対象性は、必然的に抽象的対象性であり、一つの思考物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。』<sup>51)</sup>

- ④③「しかし、織布労働との等置は、裁縫労働を、両方の労働のなかの現実に等しい物に、人間的労働一般という両方に共通な性格に、実際に還元する。この回り道を通ったうえで、織布労働も、それが価値を織り出す限りにおいては、裁縫労働から区別される特徴をもっていないこと、すなわち抽象的人間的労働であること、が語られるのである。

もっとも、リンネルの上着との同等性関係がリンネルに含まれている労働の抽象的人間的性格を表現するだけでは充分ではない。人間的労働すなわち流動状態にある人間的労働力は価値を形成するが、価値ではない。それは凝固した状態で、対象的形態で、価値になる。<sup>52)</sup>

- ④④「裁縫労働の形態でも織布労働の形態でも、人間的労働力が支出される。それゆえ、どちらも人間的労働という一般的属性をもっており、またそれゆえ、特定の場合、たとえば価値生産の場合には、どちらもただこの観点のもとでのみ考察される。<sup>53)</sup>

この手稿において、『資本論』初版では直接的な商品の分析の個所（第2版以後第1章の第1節）においても、また労働の二重性を説明している個所においても「抽象的人間的労働」という表現が使われていなかった点を改訂する作業が行なわれた、とあってよいであろう。とくに、引用の③⑧、③⑨、④①と同じ個所を改訂すべく推敲を重ねるなかで、結局「[すべての労働は] 一面では、人間的労働力一般の支出、したがって抽

象的人間的労働である。」(④①) という表現に落ちつく過程が浮き彫りにされているとはいえないだろう。しかしながら、引用③⑧の直前でマルクスは価値の実体としての「人間的労働」を導出しているが、そこではまだ「抽象的人間的労働」という表現になっていない。第2版以後と比較するためにも、改めてその部分を示しておくことと次の通りである。

- ④⑤「そこで、これらの労働生産物にのこっているものを考察しよう。いま、一つの商品は他の商品と同じようにみえる。それらはすべて、何かあるものと同じまぼろしのような対象性以外の物ではない。何か? 区別のない、人間的労働の、すなわち、その支出の特殊な、有用的な、規定された形態にかかわりのない人間的労働力の支出の对象性である。これらの物が現わしているのは、それらの生産に人間的労働力が支出されており、人間的労働が堆積されている、ということ以外のなにもでもない。それらに共通な、社会的実体の結晶としてこれらの物は一価値である。<sup>54)</sup>

#### 4. 第2版ないしはドイツ語現行版における価値実體規定について

マルクスは第2版<sup>55)</sup>への「あと書き」において「第一章第一節では、あらゆる交換価値がそれで表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密に行なわれており…」と書いている。初版での「価値の導出」、したがってまた価値実体の導出と表現も第2版において大きく改訂されている。そしてこのことに関連しては、『資本論』のドイツ語のそれ以後の版において、それ程大きな変更はみられない。というより、マルクスが直接改訂作業を行なって書き改めることができたのはこの第2版までである。<sup>56)</sup>

51) *Ibid.*

52) *Ibid.*

53) *Ibid.*, S.21

54) *Ibid.*, S. 4

55) この第2版の全訳が刊行されている。江夏美千穂訳、幻燈社書店刊、1985年。

56) 『資本論』第一巻の最終決定版については、大村泉

以下では第2版ないし現行版での価値実体についての表現について、これまでのものと比較しながら明らかにしていくこととする。

第2版以後では、価値の実体が説かれる一番最初の所で「抽象的人間的労働」という表現が用いられている。つまり、

④「労働生産物の有用的性格とともに、労働生産物に表わされている労働の有用的性格も消えうせ、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的な形態も消えうせ、これらの労働は、もはや、互いに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間の労働、すなわち抽象的人間的労働に還元されている。」<sup>57)</sup>

初版では単に「労働」としてのみ表現されていた(引用①~④)ことと較べると、価値実体についての表現がより明確になったといえよう。とくに「抽象的人間的労働」という表現が、すでに指摘したように、初版では価値形態を分析する所で初めて用いられ、第2版以後の第1章第1節と第2節に相当する個所では使われていなかった事と比較すると、なおいっそう、そう言えるように考えられる。しかしながら、価値の実体に関する表現が第2版以後においても、唯一「抽象的人間的労働」にかざられるものではない。例えば、

④「それらに残っているものは、同じまぼろしのような対象性以外のなものでもなく、区別のない人間の労働の、すなわちその支出の形態にかかわりのない人間の労働力の支出の、単なる凝固体以外のなものでもない。これらの物が表わしているのは、もはやただ、それらの生産に人間の労働力が支出されており、人間の労働が堆積されているということだけである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値-商品価値である。」<sup>58)</sup>

④「しかし、諸価値の実体をなす労働は、同等な

人間の労働であり、同じ人間の労働力の支出である。」<sup>59)</sup>

とくに「人間の労働」あるいは「人間の労働力の支出」といった表現が「抽象的人間的労働」と同様の意味内容をもつものとして使われている。そしてこの「人間の労働」と「抽象的人間的労働」との関係について第2節の最後の部分の表現は注目されるべきである。

④「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であり、同等な人間の労働または抽象的人間的労働というこの属性において、それは商品価値を形成する。」<sup>60)</sup>

明らかなように、ここでは「同等な人間の労働」を「抽象的人間的労働」と同義のものとして用いている。さらにマルクスは「人間の労働」という表現ないしはその意味するものがすでに抽象的なものであることを言明している。

④「労働は人間の労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成する……。」<sup>61)</sup>

ここでは、「人間の労働」という表現自体が、「抽象的」という形容詞なしで、すでに内容的に「抽象的」である、ことが述べられているのである。一般に価値の実体をなすものといえば、自動的に「抽象的人間的労働」が考えられていた。もちろん、それ自体は正しいことである。しかし、ここで明らかになったのは価値実体として「抽象的人間的労働」とあえて「抽象的」という形容詞をつけて表現するのは、マルクスにあっては必ずしも多くはなく、それはすでに「人間の労働」という表現自体が「抽象的」内容を表わしているからであろうと考えられる。ちなみに『資本論』の第1章の第1節では2箇所、そして労働の二重性を説いている第2節ではわずか1箇所しか「抽象的人間的労働」という表現がつかわれていない。他は「人間の労働」や「人間の労働力」が使われている。例えば、

④「生産的活動の規定性、したがって労働の有用

「『資本論』第1巻の最終決定版-アメリカ版編集指図書の意味-」『マルクス・エンゲルス マルクス主義研究』第4号(1988年7月)を参照されたい。

57) MEGA II-6, S.72.

58) *Ibid.* 59) *Ibid.*, S. 73

60) *Ibid.*, S.79. この部分の叙述が、いわゆる価値実体規定たる抽象的人間的労働の超歴史的範疇説に有力な根拠を与えている。

61) *Ibid.*, S.85

的性格を度外視すれば、労働に残るのは、それが人間の労働力の支出であるということである。裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる生産的活動であるにもかかわらず、ともに、人間の脳髓、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、こうした意味で、ともに、人間の労働である。それらは、人間の労働力を支出する二つの異なった形態にすぎない。確かに、人間の労働力そのものは、それがあれこれの形態で支出されるためには、多少とも発達していなければならない。しかし、商品の価値は、人間の労働自体を、人間の労働一般の支出を、表わしている。<sup>62)</sup>

価値形態の分析のなかで「抽象的人間的労働」が多用されている所がある。それは「等価形態」の特性を説明している部分である。

⑤「等価物として役立つ商品の身体は、つねに、抽象的人間的労働の体化として通用し、しかもつねに、一定の有用的具体的労働の生産物である。したがって、この具体的労働が抽象的人間的労働の表現になるのである。たとえば、上着が抽象的人間的労働の単なる実現として通用するとすれば、実際に上着に実現される裁縫労働は抽象的人間的労働の単なる実現形態として通用する。<sup>63)</sup>

ここでは具体的労働あるいは有用的具体的労働と対比して「抽象的人間的労働」と表現されているものといえよう。

さらに『資本論』の第2版およびそれ以後においても、価値実体規定として「労働」が用いられていることが確認できる。

⑥「だから、生産力がどんなに変動しても、同じ労働は同じ時間内には、つねに同じ価値の大きさを生み出す。<sup>64)</sup>

⑦「20エレのリンネル＝1着の上着 すなわち20エレのリンネルは1着の上着に値する」という等式的前提にあるのは、1着の上着には20エレのリンネルに潜んでいるのとまったく同じ量の

価値実体が潜んでいること、すなわち、両方の商品分量は等しい量の労働または等しい大きさの労働時間を費やさせることである。<sup>65)</sup>

#### 小括

以上でみてきた事からつぎのことが導き出せよう。

これまで、マルクスにおいて価値実体は抽象的人間的労働であると、いわば自動的に考えられてきたことが、それ自体間違いということではないにせよ、唯一の表現では決してないことが明らかにされた。かえって、人間の労働という表現の方が普通に用いられており、またこの人間の労働それ自体が「抽象的属性」(引用⑨)をもっていると考えられているのであるから<sup>66)</sup>、「抽象的人間的労働」という表現は、まさに屋上屋を重ねる式の感がないではない。それゆえマルクスはこの「抽象的人間的労働」という表現を必ずしも多用していないのはすでにみた通りである。「抽象的」という形容詞を取ってつけるのは、マルクスがそのことを特に強調したいとき、ことがらをよりはっきりとさせたいとき、あるいは「具体的」労働との対比が念頭にあるとき、等であるといえよう。

一方、「人間の労働」については、マルクスは「人間的」ということを、個々の具体的な労働が「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」(引用⑥)であるから、あるいはそれらが「独自に人間的な有機体の諸機能である」(引用⑩)からとしている。しかしながら、これとても、そもそも考察の対象が人間社会であり、したがってそこでの人間の労働が考察の当然の対象であり、ないしは前提であるとするれば、この「人間的」という形容詞も取ってつけなくても「労働」だけで、いわば充分内容的には言いつくさ

62) *Ibid.*, S.77. 引用⑥も参照のこと。

63) *Ibid.*, S.90

64) *Ibid.*, S.79

65) *Ibid.*, S.86

66) このことは『経済学批判』においてすでに明言されている。「一般的人間的労働というこの抽象…。」(MEW. Bd.13, S.18)

れる、といえよう。このような意味で、マルクス自身、すでにみたように、価値実体規定として単に「労働」という表現を用いているのである(引用①-⑤)、ちなみに『経済学批判』においては「人間的」という形容詞を用いなくて「抽象的一般的労働」<sup>67)</sup>という表現が用いられている。

以下、若干の残された問題を指摘して稿を閉じることとする。まずは学史的な事として、マルクスが例えばスミスやリカードの価値実体把握をどう継承し発展させているかという問題があろう。さらに、マルクス自身のなかでそれが、

つまり価値実体についての把握が、彼の経済学研究の比較的初期の段階からどのように発展してきたか、という問題が残されている。又、マルクスにおける労働、あるいは価値実体の把握が、その経済理論全体の中で位置づけられる必要がある。特に価値形態論との関係は、そのなかでも重要な論点となろう<sup>68)</sup>。もちろん、特にこの「抽象的人間的労働」の性格をめぐる論争に関しても、今後一定の見解を示していくこととなろう。

67) MEW, Bd. 13, S. 17

68) この点に関して、竹永進「『資本論』冒頭の価値実体規定について」『商学論集』(福島大)第52巻2号、を参照されたい。